

有漢地域まちづくり協議会

住民による、まちづくり計画書を策定

有漢地域まちづくり協議会は、平成18年度に「有漢地域風のまちづくり計画―交流・輝くまち・うかん」を策定。協議会のメンバーが地域の将来像、方向性を示そうと一年かけて協議して作り上げました。

今後10年間のまちづくりの方向性をまとめた基本構想では、豊かな自然環境と岡山自動車道有漢インターチェンジを生かした「活力と

潤い、輝きのあるまちづくり」を目指すこととしています。

基本構想に基づき、今年度から平成23年度までの5カ



有漢地域風のまちづくり計画書

年を計画期間とする基本計画には「地域文化の振興」「地域福祉の向上」「地域振興」の3本柱に沿って主要施策が盛り込まれました。

「地域文化の振興」では個性と活力のある地域と人づくりのため、各地区推進委員会を充実し、地域間の交流を深めながらふれあいのあるまちづくりを行うこととしていきます。取り組みとして、町並みの保存や再整備、グラウンドゴルフ場クラブハウスの建設等が掲げられています。「地域福祉の向上」では快適で潤いのある生活環境づくりのため、地域で支え合うシステムづ

交流・輝くまち うかん

中国横断自動車道岡山米子線の開通により、太平洋と日本海が一本の高速道路で結ばれ、有漢インターチェンジが設置されました。

有漢地域は、この南北軸を基軸とした人・物・情報の交流拠点としてアピールし、存在感のある地域の創造を目指しており、「交流・輝くまち うかん」をスローガンに掲げ、隣接地域との連携交流も視野に入れたまちづくりを進めています。

昨年度、有漢の将来像を描いたまちづくりの計画を策定しました。若者に地域へ住んでもらえるよう受け入れ体制を皆さんとともに考え、「有漢に住んで良かった」と思われるまちづくりを目指しています。



有漢地域まちづくり協議会
会長 野田 数馬さん

くりを盛り込み、防災マップ作りなどを挙げています。さらに、

「地域振興」では豊かな暮らしの基礎づくりのため、道路網・情報通信・水利用等の生活基盤整備やうかん常山公園を拠点とした観光・農業体験等のルートづくりを盛り込んでいます。

計画書策定を通し、地域の課題を検討していく中で、「自分がまちづくりの主役であるという実感がわいた」と協議会メンバーの声が聞かれます。

今後のまちづくりは、この計画書をもとに地域住民が一体となって取り組みます。



毎年開催されている「風ぐるまフェスタ」は交流事業の一つです。

協議会の取り組みを掲載した「有漢地域まちづくりだより」(第1号)を発行。年度ごとに地域の皆さんにお知らせすることとしています



成羽地域まちづくり協議会

地域で取り組むまちづくり

成羽地域まちづくり協議会は、地域内10カ所にあるコミュニティ協議会、商工会、観光協会などの団体で組織されています。協議会では住民参加のさまざまな活動やイベントなどを行っており、このうち二つを紹介いたします。

一つは、毎年8月第1日曜日



毎年、多くの親子連れらでにぎわう魚つかみ大会

に成羽町美術館・流水の庭で開催される「島木川子ども魚つかみ大会」。これは枝地区の30〜40代の15人ほどが、地域の子どもたちに夏休みの思い出の一つになればと、実行委員会を結成し、平成14年から取り組んでいるものです。会場にはアユやウナギ、金魚などが放され大変にぎわいます。

今では、地域の皆さんが参加できるまちづくり事業として定着し、他の地域の子どもたちや帰省客も加わるなど年々参加者も増えていきます。

この事業に取り組むことにより、枝地区では「地区全体の住民同士の交流が広がったようだ」との実行委員会の声も聞かれます。

二つ目は、成羽地域の特産品を発送販売する特産品推進事業「ふるさと成羽」を味わっていた、たくとともに、地域外の人と生産者グループとのつながりを持つとうと、「成羽ふるさと」の会

成羽地域まちづくり協議会の目指すもの



成羽地域まちづくり協議会
会長 平松 英之さん

平成16年10月に、1市4町による市町合併後、旧市町それぞれに、まちづくり協議会が発足して3年目に入りました。

発足時、地域の活性化、住民生活向上のために、地域で行う事業を行政主体から住民主体への発想で柔軟性を持たせ、限りある財源を有効に使用していくということであったと思います。

成羽地域まちづくり協議会でも、過去2年間21人の委員による新事業の企画等も、市に提出してきました。

新事業は、市の財政面の関係もあり不採択となり、旧事業だけの現状であります。

現在は、委員の勉強不足もあり無理ですが、全委員が切磋琢磨し、将来、地域住民全員参加のまちづくりができればという思いです。



箱詰めするお飾り。一つ一つ丁寧に仕上げていきます(上)

チラシを作成し、会員を募ります(右)



合併前は行政主体で行っていたが、現在は農業生産者や農産グループなど10団体を中心となつて取り組んでいます。会員の募集、品物の収集から発送に至るまでを自分たちで行い、美しく箱詰めする方法、商品の量は適切か、また味はどうかなどの研究も行っています。

制度がつけられました。賛同を得た会員に1セット1万円の特産品を送っており、会員は現在約300人。

合併前は行政主体で行っていたが、現在は農業生産者や農産グループなど10団体を中心となつて取り組んでいます。